第２次岐阜県教育ビジョン検討委員会

第１回　小・中学校における学力向上専門委員会　主な意見

Ｈ２５．５．２（木）１３：００～１５：００　教育委員会室

◆◇主な意見◆◇

①「授業の在り方・指導方法」について

・Ｂ問題に比べてＡ問題の正答率が伸び悩むのは習熟を図る時間がないなど、授業の展開に課題があるのではないか。

・質問紙調査で「勉強が好き」「役に立つ」の数値が低い。義務教育段階では、具体と抽象のやりとりを大切にし、具体にもどるという意味から、体験的・具体的な活動を行うことで、「勉強が好き」「役に立つ」と実感できるようになるのではないか。

②「教科担任制」について

・小学校では、生活が安定すると学習が安定してくる。しかし、今の児童生徒をみていると、「生活が安定すると学習が安定する」のは４年生頃までで、５，６年についていえば、「学習が安定してくると生活が安定する」面があると感じる。その意味では、小学校高学年で教科担任制を行うことは非常に意味がある。

③「習熟度別少人数指導」について

・学校では、習熟度別少人数指導のおかげで、下位１０％の児童生徒も分かったという実感をもって授業を終えている。しかし、次の日にはできなくなっている。下位の児童生徒こそ単に繰り返せばよいというわけではなく、寄り添って筋道を教え、学ぶ喜びを味わわせることが大切。中位の児童生徒は繰り返し学習で伸びる。個の学習状況に寄り添って指導することが習熟度別少人数指導のよさである。

④「仲間づくり」について

・仲間と学び合いながら進める学習は岐阜県が大切にしてきたものであり、学級づくり・人間関係づくりの根本を生かすもので、小学校でこそ必要である。岐阜県の施策に、コミュニケーションや仲間づくりを入れていくことは必要である。

⑤「家庭学習」について

・基礎学力の習熟・定着のためには家庭学習と学校との授業とをつなげることが大切である。保護者との連携を充実する必要がある。

⑥「地域との連携」について

・地域との連携では、地域から学校への働きかけが多い。学校から地域へ働きかけることが多くなるとよい。家庭学習についても、自分から進んで取り組む児童生徒を支えるのは地域である。祖父母が一緒に九九をやるなど地域人材を活用してもよい。

⑦「高等学校への連続」について

・高校へは基礎学力が十分に身に付いていない生徒も入学してくる。学ぶ喜びを小・中・高ともに意識することが大切である。高校では、先の進路や将来を見据えた力は何かを考え、より伸ばしたい学力を身に付けさせていくことが役割と考えている。

⑧「へき地・小規模校での学力向上」について

・へき地・小規模校を設置している市町村教育委員会では、４点について危機感をもっている。１点目は過疎化の問題。地域住民に過疎地が大事にされていないのではないかという不安がある。２点目は予算の問題。合併交付税の交付期限が切れたときに、どのように予算を組むのか。３点目は少子化の問題。１学級１０人程度の学校でどのような指導をするのかを考えないといけない。４点目は、教員の確保の問題。勤務の本拠地が本市の教員だけでは不足してしまう。学校が地域の中核となり、地域に残ってくれる教員を増やすことが必要となっている。

⑨「成果指標」について

・指標として、全国学力・学習状況調査の結果について全国比で示すことばかりではなく、岐阜県らしい別の指標を設定すべきである。